

2023年9月3日（日）主日朝礼拝説教

『この世と神の国』 井上隆晶牧師

マタイ 22章 17～21 節、ヨハネ 18章 33～38 節、19章 8～16 節

①【この世と神の国】

イエス様がピラトから裁判を受けたとき、イエス様はピラトに言いました。「わたしの国はこの世に属していない。もし、わたしの国が、この世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世に属していない。」（ヨハネ 18：36～38）

イエス様は、はっきりと「わたしの国はこの世に属していない」といわれました。この世と神の国は、違うと言われたのです。確かにこの世を創造されたのは神ですからこの世は「聖なる良いもの」であり、神はこの世で働いていますから、この世も神の国ですが、人間の罪によって歪んでしまいました。神の支配が完全に行われていないのです。だから主の祈りで「御国がきますように」「御心が天で行われるように地で行われますように」と祈るのです。この世は神を無視してすべてを行います。人間は神を追い出したのです。人間は御心を求めず、それを行おうとしません。人間が地上にいる限り、罪は存在し、死も存在します。そこには完全な平和はできません。人間はこの世を道ずれに墮落したのです。

しかしキリストがこの世に来られ「神の国」をもたらし、それを広めるように命じられました。教会は世界中にキリストの教えと神の国を伝えました。最初に地上に現れた神の国がビザンチン帝国でした。皇帝コンスタンティヌスはキリスト教に改宗し、313年に「キリスト教寛容令（ミラノ勅令）」を出しました。これにより迫害時代は終わり、更にテオドシウス皇帝の時、キリスト教は正式にローマ帝国の唯一の合法的な宗教（国教）となりました。324年にはローマ帝国の都はローマからビザンティウム（今のトルコのイスタンブール）の町に移され、皇帝の名にちなんでコンスタンチノープルと呼ばれました。333年に「荘厳な開都式」が行われ、この都ではいかなる異教の礼拝もしてはならないことが定められました。325年にはコンスタンティヌス皇帝自身がニケアでキリスト教の総会議を招集します。その会議に出席した教会史を書いたエウセビオスは「皇帝みずからがあたかも天からの神の使いのように会議を取り仕切った」と書いています。キリスト教はビザンティン帝国のあらゆる面に入り込んでいました。休日はすべてキリスト教の祭日であり、礼拝が行われました。円形競技場での競争は聖歌を歌って始められ、商業上の契約は三位一体の神に祈って行われ、契約書には十字架の印が押されました。

●4世紀のニュッサのグレゴリオスはこう書いています。「街全体が神学論争で溢れている。広場も市場も交差点も、古着屋も両替商も食料品店もみんな議論に忙しい。もし誰かに両替を頼めば『御子は生まれたのか、生まれなかったのか』に

ついでに議論が始まる。もし一塊のパンの値段を尋ねれば『父は偉大で、御子キリストは父より劣るのか』と言った答えが返ってくる。…』

私はこれを読んで驚きました。想像してみてください。国会を開く時に、聖歌が歌われ、商業取引の時に祈りを献げ、十字架の印が押され、買い物をする時も、何をする時にも、聖書の話が話題として出てくるのです。国教になるとはそういうことなのかと思いました。夢のような話です。日本では考えられません。地上に現れた神の王国、それがビザンチン帝国だったのです。しかし、その帝国もだんだんと権力と富を持つようになると腐敗していき、やがてイスラム教によって15世紀に滅ぼされてしまいました。ビザンチン帝国は神の国のイメージ(像)であり象徴でしたが、神の国本体ではなかったのです。神の国と地上の国を同一視してはなりません。帝国や教会が墮落した時、必ず現れたのが修道士たちでした。彼らはこの世を捨て、権力や富を捨て、砂漠に出て行き、祈りと禁欲生活を始めました。神の国は、この世の王国ではないことを修道士たちは証したのです。これが「この世」と「神の国」の見方のヒントになるでしょう。教会はすべてクリスチャンで構成されていますが、問題だらけです。それを見ただけでも分かると思います。世界中の人が洗礼を受けてクリスチャンになり、キリスト教が国教になったとしても、問題だらけであり、神の国は地上には決してできないということです。神の国は人間の力でできるものではなく、聖霊による支配であり、神の力によって与えられるものであるということです。「新しい天と、新しい地が…天から降って来るのを見た。」(ヨハネ黙示 21:1~2)人間の力では地上に平和の楽園は決してできないということです。それだけははっきり覚えておかねばなりません。カルト宗教もユダヤ教徒も地上の楽園実現を主張しますが、それは決してありません。彼らは神の国は地上に現れると思っています。だからこの地上が大事になります。地に執着するので戦争が起こるのです。宗教戦争のほとんどは神の国理解を誤っていることから起こります。ロシアもそうです。地上に「神の王国」を力づくで作ろうとしています。

②【この世の法則と神の国の法則】

20日に濱田牧師から「ぶどう園の労働者のたとえ」のお話を聞きました。それは、神の国では、朝から働いた者と夕方から1時間しか働かなかった者が同じ扱いを受け、同じ恵みを与えられる、というものでした。神の国では人間はいかなる権利も正しさも放棄しなければなりません。神の国の王はキリストであり、彼自身が神の国の「法」なのです。彼が「赦す」と言えば、どんな悪人でも赦され、彼が「与える」と言えば、どんなに働きがなかった人も豊かに受けるのです。

●三浦綾子さんがこんなことを書いています。

「キリスト教の愛は、厳密にいうと『神ご一任』のことであって、神の愛だけなんです。神の愛と人間の愛とは比較にならないものですね。神は愛なりと言いますけれど、ほかのものを愛なりとは聖書には書かれていない。互いに愛し合いな

さいと説いてあっても、それは神の愛を学ぶことだろうと思うんですね。」

一方、この世の法則は「倫理・道徳・正義」です。朝から働いた者と夕方から 1 時間しか働かなかった者が同じ扱いを受けるのは正義に反します。だからこの世の法則で生きている人は、意味が分からないのです。「それはおかしい。それでは無秩序になる」といいます。でも大事な点を忘れてしています。この世の法則である「倫理・道徳・正義」（聖書では律法といいます）は神から出たものであって決して悪いモノではないのですが、それは完全ではないということです。私たち人間が悪くならないように一時的に与えられる風邪薬のようなもので、対処療法にしか過ぎません。それに愛が加わらなければ正しく用いることは出来ないのです。愛とは神であり、キリストです。神抜き正義、神抜き道徳は不完全です。キリストが律法を完成させるからです。「**私が来たのは律法…を廃止するためではなく、完成するためである。**」（マタイ 5 : 17）この世の人の正義は「神抜き、キリスト抜き」の正義です。だからこの世の法則では天国はできないのです。

●例えば信号を守ることは正義です。守っている人は「自分は正しい」と思い、守らない人を裁きます。正しさはエスカレートし、守らない相手を非難中傷し、傷つけます。しかし一つ正しい事を守っているからといって、他のすべてのルールを守っているかというところでもありません。その一点に固執していることが多いのです。他人から見れば「あんたもルールを守っていないよ」ということになります。それはその人の一つのこだわりであり、こだわりが強いほど、人を傷つけます。そこには平和は実現しません。だから不完全なのです。正義に固執してはなりません。自分は正しいというこだわりを捨てることです。

私たちは神の国に生きる者です。キリストを王とし、彼の法則の中で生きます。しかし私の肉体は、まだこの世に属し、この世を必要としており、この世に支配されています。この世の物を食べなければ死んでしまいますし、この世の王にも仕えなければなりません。二重の生き方をしなければならないのです。しかし、この世は必ず滅びるのであり、永遠に続くわけではありません。しかし神の国は終わることはありません。「**その国は終わることはない**」（二ヶア信条）だから、この世に執着しない事です。不完全なもの、朽ちて行くようなものにこだわってはいけません。キリストもこの世の命と肉体を求める者に、それを与えてしまいました。「**あなたがたはこの世に倣ってはなりません**」（ローマ 12 : 2）「**世もあるものも愛してはなりません。**」（I ヨハネ 2 : 15）「**世の友になりたいと願う人はだれでも、神の敵となるのです。**」（ヤコブ 4 : 4）

日曜日に教会に來たり、平日に教会で祈禱することは、神の国で生きることの練習なのです。この世に埋没しない事です。魂はいつも軽く、自由に羽ばたきましよう。